# 危機

２００８年1月
日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
西九州伝道所　　佐々木正明

**警鐘**

私たちの教団は、このまま行くとあと２０年前後で、所属教会のおよそ４分の１から３分の１が、活動停止もしくは閉鎖状態に陥り、やがては消滅することになります。特に、私たちが伝道所と呼んでいる開拓途上の教会の多く、中でも地方あるいは人口減少地域に存在する開拓途上教会のほとんどは、生き残ることができません。その結果、現在活発に活動している大都市圏の大きな教会、あるいは比較的安定している中堅の教会も、成長に著しい悪影響を受け、教団全体として見ると、非常な弱体化、あるいは規模の縮小化となって現れてくるでしょう。それでも、とても能力のある伝道者、優れた立地条件、複数の有力な信徒の存在などの好条件が重なった教会は、成長し続ける可能性があります。しかし平均的な教会は低迷することになるに違いありません。

のっけから、３流週刊誌の記事のような書き出しで申し訳ありませんが、何もこけ脅しのためにこのようなことを言っているのではありません。むしろ、非常に真面目な憂慮から、警鐘を鳴らそうとしているのです。たとえ、「４分の１から３分の１」が、５分の１、６分の１に減ったところで、大変な問題です。ただし、私がこのように言うのは、綿密な調査や分析の結果ではありません。そのようなことを行なわなくても、少しばかり考えれば自明なことです。実際多くの同労者の皆様はとうに気付いていて、ただ、語るのをはばかっておられるだけでしょう。それで、少々軽率のそしりを免れ得ないでいる私が、その軽さを発揮して語りだしているだけのことです。

このようなことを言おうと思い立ったのは、昨年１１月の総会で、教団の教勢報告書を読んだことと、同じ頃、東京郊外の教会に招かれて、その教会の姿と自分の開拓している教会とを、比較検討する機会が与えられたことによります。また、総会で配布された国内伝道部の教勢分析の資料も、強い刺激となりました。これらのことによって改めて気付かされ、驚愕の事実として私の脳裏に焼きついたのは、地方の開発途上教会の衰退と、大都市圏の教会の隆盛です。

もちろん、問題は地方と大都市圏と言った単純なものではなく、むしろ、地方および人口減少地域と大都市圏および人口増加地域となるでしょう。また、大都市圏と人口増加地域の教会でも、隆盛と表現できるのはわずかに過ぎません。日本の伝道が全般的に、さらに困難な時代に入ったのかも知れません。それにもかかわらず、地方や人口減少地域にある開拓途上教会の困窮に比較すると、まさに隆盛と言えるほどなのです。また、大都市圏の人口流入地域でも、さまざまな条件のために苦闘を続けている教会もあれば、地方の人口流出地域、あるいは過疎化の中で見事に成長している教会もあります。それぞれの歴史とそれぞれの条件があり、一概にこうだと言えるものではありません。それでいながら、やはり、一般的には地方の開拓途上教会と、大都市圏の既成教会として比較することができます。

## Ⅰ　開拓途上教会が消滅すると断言する理由

開拓途上教会が消滅すると断言する理由は簡単です。簡単だからまた、断言できるのです。とはいえ、ひとつの理由によるものではなく、いくつかの理由、あるいは要因の複合によって起るものです。

### Ⅰ．A　牧師の高齢化

日本全体が高齢化社会になっています。牧師の世界も同様です。私たちの教団も例外ではありません。ひとりひとり数え上げなくても、いわゆる団塊の世代以上の牧師たちが相当数に昇ります。彼らはあと１５年、２０年で、確実に働けなくなります。召される方々もたくさん居られることでしょう。４０年、５０年前に伝道者になった人たちの数は、現在伝道者になろうとする者たちの数を圧倒的に上回っています。日本の若者の数が少なくなっているだけではなく、全体的に、救いに入る若者が減少しています。その上、職業に対する選択肢が多くなり、献身に対する決意も鈍りがちです。たとえ、これからは開拓を止めて教会の数を増やさないようにしても、牧師がいなくなってしまう教会が続出します。これは避けられない現実です。

### Ⅰ．B　地方の伝道の困難さ

詳しくは後述しますが、地方の伝道は、大都市の伝道に比べると非常に困難で、成長が遅く、経済的にも苦しいものです。今、よほどの理由がない限り、地方での開拓に情熱を燃やすどころか、地方の教会に赴任したいと願う、若い伝道者はいません。ですから、都会ならばいざ知らず、地方の開拓途上の教会が無牧の状態になると、そこに新たに赴任してくる伝道者はいなくなります。戦前派や戦中派、あるいはせいぜい団塊の世代までの人間、日本中が生活苦を体験していた中で生まれ育った者ならばいざ知らず、その後に生れた日本人の多くは、生活苦の中で生きるすべを知りません。伝道者と言えども、例外ではないのです。あえてそのような中に、飛び込もうとする者はいません。まして地方伝道では、いつまで経っても芽が出ないことの方が多いのですから、なおさらのことです。芽が出ない働きを目指して頑張る人間は滅多にいません。どうせ働くなら、芽が出るだけではなく、花も咲き実もなる、可能性の大きい条件の中で働くことを選びます。

### Ⅰ．C　都会の教会の穴埋め

高齢化は、とうぜん都会の教会にも押し寄せます。現在６０歳の牧師のほとんどは、２０年後には牧師としての働きを続けられなくなっているはずです。５０歳代でも困難です。後継者となるべき、若い伝道者は、絶対的に不足します。神学校の通信教育が始まりましたが、それは伝道者不足を緩和することはあっても、解決することはないでしょう。すると大都市圏の教会は、地方の開拓状態の教会を牧会している牧師に、目をつけることになります。教団の指導部も、おなじ潰すのならば、都会でそこそこやっている教会よりも、地方で、いつまで経っても自立できないでいる教会を潰した方がよいと、判断するでしょう。地方でいい加減苦労してきた牧師も、ここらで都会に出て少しだけ楽をさせてもらっても、神様はお怒りにならないと思うでしょう。愚痴ひとつ言わずに、長年、苦労を共にして、他の同年代のご夫人よりも数本しわの数が多く、刻みが深くなっている奥さんにも、ここらで、少しだけでも楽をさせたいと思うことでしょう。そういうわけで、地方の教会の無牧化には、大都市圏の教会の穴埋めとして、ますます拍車がかかることになります。

## Ⅱ　　教団全体の衰弱化

現状を継続するならば、２０年後には、確実に、地方の開拓途上教会は消滅に近い状態になります。そしてそれは、地方の開拓途上教会の消滅、あるいは開発途上教会全体の消滅に終わるものではありません。かえってそれは、大都市圏の確立した教会にさえも、大きなマイナス要因となってきます。なぜなら、確立された大都市圏の教会、あるいは成長している人口増加地域の教会の多くは、地方の開拓途上教会の犠牲の上に存在しているからです。

アンケートなどを採って調査したわけではありませんし、そのようなアンケートが採れる状態ではないようにも思いますが、私の個人的観察によりますと、大都市圏の教会の構成員の多くは、地方出身者です。そしてまたそのうちの多くの者は、若い頃に、地方の開拓途上教会を通して福音に接し、教会に導かれ、救いに至った者たちです。大都市圏の教会の信徒の何割がそのような部類に入るか、正確なことは言えませんが、かなりの割合に上るのではないでしょうか。確かに、大都市圏の教会に来たときは、右も左もわきまえない、挨拶もろくに出来ない田舎者でした。聖書の知識も足りなく、訓練もなっていない、「これでもクリスチャンか。一体牧師は何をしていたのか」と、言いたくなるような代物だったかも知れません。あるいは名ばかりのクリスチャンだったかも知れません。まだ、聖書もほとんど読んだことがない状態だったかも知れません。彼らをしっかりとしたクリスチャンに育て上げたのは、確かに大都市圏の牧師です。それでも、彼らが大都市圏に出て、教会に行って見ようと思い、それを行動に移したのは、地方の開拓途上教会との接触があったからです。もし彼らが地方に残って生活できる社会状況だったならば、彼らはいまや地方教会の（開拓ではなく）力となっていたはずなのです。

地方の開拓途上教会で、確実な信徒を作り上げるのは至難の業です。そして実際多くの者が、接触してしばらくすると都会に流出して行くのです。やっと真面目に教会に通いだした。やっと集会でお祈りが出来るようになった。やっと奉仕をし始めた。やっと献金をしだした。やっと、やっとと言うところでいなくなるのです。そのような人たちの何割かが、出て行った場所の教会で成長し、奉仕をし、献金もするようになるのです。そういうわけで、もしも、地方の開拓途上教会の働きがなければ、現在大都市圏の教会で忠実に信徒として生活している者の多くは、存在しなかったのです。大都市圏の教会の多くは、地方の開拓教会の犠牲の上に成り立っているからです。今後、地方の開拓途上教会が消滅していくならば、大都市圏の教会も成長の大きな要因を失い、低迷することになるのです。そしてそれは、数年のうちに、現実のものとなりだすのです。

## Ⅲ.　私たちはどうすべきか

それでは、このような危機に直面して、私たちはどうすべきでしょう。単純に考えて、三つの選択肢が思い浮かびます。

### Ⅲ．A　何もしない

何もしないのが一番簡単です。やがて地方の開拓途上教会が、ひとつずつ姿を消すのをただ悲しんで見ていれば良いのです。その教会で長いこと働いてきた牧師の「無能力さ」を嘆き、教団の指導者の無策を非難すれば、幾分気が晴れるかもしれません。そうこうするうちに、能力の高いやり手の牧師がいる大都市圏の確立された教会にも、確実に悪い影響が明らかになってきます。教団全体の勢力の低下も覆いようもない事実となって現れてきます。直面する危機に気付かないでいたならばいざしらず、こうして私の警告に耳を傾けてしまった後で、気付かなかったでは済まされません。もちろん、「彼の言うことは信じられないからなァ」という方がいらっしゃることも、承知していますが。私の言うことにも、一理とは行かずとも、半理くらいはあるのではないかと思います。というより、現状を真面目に直視して欲しいものだと思います。

### Ⅲ．B　地方の開拓教会を閉鎖する

地方教会の困難さ、今後の発展成長の見込みの薄さ、牧師の高齢化、後継者の不足、経済的負担などを考慮し、「積極的に」地方の開拓教会を閉鎖するのが、次の選択肢です。教会成長論的に考えるならば、現在の日本での地方の伝道には、あまり見るべきものがありません。同じだけの労力と資金を費やすのならば、大都市圏、あるいは人口流入地域で伝道すべきです。そのほうが日本全体の宣教に貢献できます。都

会の教会が力をつけたならば、地方の伝道も可能になります。

ですから、消極的に、しょうがないから地方の開拓教会を閉鎖するのではなく、あるいは何もしないで見殺しにするのではなく、積極的に、宣教戦略として、出来るだけ傷が小さいうちに手当てをする意味で、閉鎖するのです。閉鎖することによって、いくらかでも戦力に余剰が出来たならば、大都市圏の伝道に力を入れるべきです。じっさい、比較的小さく、最近になって戦略的宣教を取り入れた団体には、地方の伝道には手を出さないと決めているものがあると聞きます。地方の宣教に手を染めると、教団全体が力を「浪費」することになるからです。

私たちの教団は、現在のような急速かつ過激な人口流失、過疎化の傾向が見えていなかった時代に、日本全国の宣教を志し、「各都道府県に必ずひとつの教会を」というモットーを掲げて、開拓を進めてきました。しかし、困難な地方の開拓が軌道に乗る前に、社会が大きく変化したのです。４０年前、あるいは３０年前の日本の地方伝道は、現在ほど困難ではなかったように感じます。地方伝道だけではなく、都会でも同じように感じます。ですから、それ以前に開拓を始めた地方教会の中には、現在中堅的な働きをするほど成長した教会も、結構あることでしょう。しかし、１９７０年代の後半、あるいは８０年代以降に始められた地方開拓のほとんどは、非常な苦戦を強いられています。

教団の教勢報告書、あるいはそれをもとにした国内伝道部の分析でも明らかなように、現在、伝道所と分類されている開拓途上教会の衰退は、実に著しいものです。信徒数、礼拝出席者数、子どもの出席者数、献金額、受洗者数、受霊者数、すべてにおいて激減しています。それが、教団全体の負担になっています。この負担を軽減し、その力をより効果的な大都市圏の働きに移すならば、教団はもっと確実な成長を望むことが出来るに違いありません。ですから、地方の開拓途上教会を積極的に閉鎖するのは、現段階では二番目にたやすく、それなりの効果も期待できる方策だと思います。日本での地方伝道の時期は過ぎた。これからは大都市、もしくは人口増加地域の宣教を目指す。地方開拓教会の使命は終わった、役目は果たしたと理解すればいいのです。

ただし、これを行なうには、いくつかの困難があります。まず、宣教学的に、私たちのようにこれまで地方の開拓にも力を注いできた中堅の教団が、いまさら、地方伝道から手を引くことが許されるかと言う問題です。設立されたばかりの若い教団、あるいは単立の教会ならばいざ知らず、私たちの教団ほどの力を蓄えているものには、それなりの責任があるのではないでしょうか。私たちが地方伝道を投げ出さず、継続してきたからこそ、地方伝道に手を染めない若い教団や大都市圏の教会が、支えられて来たのです。そして、それは今後も必要とされている働きではないかということです。

次に、地方の開拓教会の閉鎖は、今まで地方伝道に心血を注いできた伝道者たちの、強烈な反発を買うことでしょう。教団を出てでも、石にかじりついてでも、エリヤのカラスを信じて、地方伝道に留まる伝道者も出てくるでしょう。教会成長的な考え方自体に反発する伝道者も少なくありません。宣教というものは、単に効果だとか成果で判断されるべきものではなく、本来、情熱や幻が先行し、それから、方策や手段が考えられるものだからです。

さらに、地方の開拓途上の教会を閉鎖に追い込むと、今いる信徒たちはどうなるのか、彼らに対する責任はないのかと言うことも、問われることになります。ただこれは、大都市圏の教会を潰すことになっても同じ、と言うより、人数的には大都市圏の方が多くなるために、取り上げられないことでしょう。

### Ⅲ．Ｃ　　地方宣教の新たな方策を打ちたて、教団挙げて取り組む

これは一番困難な道です。大体、そんな方策があるのかと言われるでしょう。また、たとえ方策は出来ても、教団を挙げて取り組むことが出来るかと、反発もあることでしょう。しかし、第一の道も第二の道もだめだとするならば、第三の道を取らなければなりません。中途半端なやり方は、何もしないのに近くなります。教団を挙げて徹底して取り組むのでなければ、始めからやらないほうが良いでしょう。そのために必要なことは幾つもあります。

**Ⅲ．Ｃ．１　　教団の教会論の確立**

私たちの教団には、教会論がありません。これは私たちの教団に限ったことではなく、世界のアッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団に共通していることであり、さらに世界のほとんどの教団に共通していることです。キリスト教界には、つい最近まで、聖書的な教会論は皆無に近かったのです。ですから、私たちの教団もまた、さまざまな事情で新しい教団を創立せざるを得なくなって、社会学的な理由から、あるいは伝道方策上の都合から、作り上げることになったものです。そのときの参考になったのは、当時の国家の政治形態や周囲の教会の政治形態、あるいは自分たちがかつて所属していた教会の政治形態であって、聖書的にどうあるべきかという考察が行なわれた形跡は、ほとんどありません。アメリカ・アッセンブリーズ・オブ・ゴッドは、その経緯とアメリカの政治形態から、民主主義を基盤とした会衆的な考え方を中心に据え、少しばかり長老的な組織形態を併せ持ったものとして始まりました。

教団を形成した初期の伝道者たちの多くは、すでに、自分の牧会する教会を持っていたり、自分が指導する働きを持っていたりしていましたので、それぞれの自由を最大限に認める、非常に緩やかな組織となったのは当然です。また、聖霊のバプテスマの経験と信仰のために、それまで所属していた教団や教会を追放された人たちが多かったために、教団のような組織に対する不信感が強く、柔らかな組織とせざるを得なかったところもあります。そこには、おなじ聖霊のバプテスマという信仰体験をしたことによる、自然な一体感、アイデンティフィケーションはありましたが、より聖書的な、おなじひとつのキリストのみ体に所属して､その霊的事実を存在と働きの両面で具現していくために､教団を存在させると言う理解が、まったくと言うほど欠けていました。

それは日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団においても同じです。おなじ信仰の体験をした者、あるいは信仰形態を持った者が、互いに力を寄せ合って、より安定した存在と、より効果的な働きを目指したのであって、聖書が教える教会とは何か、それを具体化するために、教団はどうあるべきかなどと言うことが、考察された形跡はありません。そのような、聖書的な教会観を礎石としようとする努力が、まったくなされていないのです。それが現在まで継続しているわけです。したがって、私たちの教団の教会の間、あるいは伝道者の間には、真に聖書的な教会観に立った交わりがないのです。おなじキリストのみ体に所属し、おなじキリストの命に生かされているという、理解と実感が決定的に不足しているのです。

もちろん、私たちの中にはおなじ信仰とおなじ信念に立つという思いがあり、互いに助け合い協力し合って行こうとする思いはあります。ところがそのような思いは、おなじ釜の飯を食った仲間や、おなじ種類の職業を持った人々の協同組合の一体感と、あまり変わらないものです。ですから、私たちの教職の間には、中央聖書神学校を卒業したという同窓会的一体感が、そうではない教職者を疎外する傾向さえないとは言えません。おなじ聖霊によって生かされているという、霊的一体感とその具体的現われとしての交わりが欠けているのです。私たちの関係、神の家族の関係は、キリストの血によって作りあげられたものであり、この世の親子や兄弟の血縁関係よりも強いものであるはずですが、私たちの教団所属の牧師たちが、それほど強い兄弟愛で繋がっているとは、正直、感覚的にも実際的にも理解できません。多分、軍隊で命を分け合った戦友ほどのつながりもないことでしょう。

いうならば、私たちの教団はひとりひとりの伝道者が、互いに協力し合うことによって互いに益を得る

ために存在している、協同組合のようなものに成り下がっているのです。しばらく前の教団の検討委員会は、教団を「教会的な共同体」という言葉で表現しましたが、それは、教団は単なる協同組合のような、連盟や同盟ではなく、聖霊の交わりがあるのだということを言おうとしたものと理解できます。しかしそれは不充分であり、間違っています。なぜなら、教団は教会そのものであり、日本という地域に自分を表現した普遍的教会そのものなのです。そこには、パウロが口を極めて語った、あらゆる教会の性質が満ち溢れているべきものです。互いに愛し合い、命を分け合って生きる姿があるはずです。

ところが、教会論の欠陥のために、私たち教職の間にも、教会の信徒の間にも、そのような理解も感覚も感情もほとんどないのです。かえって、いわゆる自己主義、マイチャーチ主義がまかり通るようになっているのです。そのために、私たちには、痛んでいる教会を本当に思いやる心が薄くなっています。本当に痛んでいる伝道者に対する配慮も欠けています。任命制をとっていながら、任命した後の手当てが行き届いていません。地方の困難な土地で、あらゆる意味で苦労を重ねながら、数十年も働き続けている伝道者たちにたいする、思いやりが充分ではありません。国民年金も教団の厚生年金も、納められないような環境にいた牧師たちには、最後まで日が当らないのが現状です。(厚生部の努力は大いに買いますが)一方、裕福な確立された教会に派遣された牧師、伝道の効果が上がる土地に任命された伝道者は、ゆったりと余生を送ることが出来るのです。

もちろん、教団所属のすべての教職がそうだと言うのではありません。地方から出身した信徒の十一献金は、出身教会に送り続けている牧師もいます。長いあいだ、地方の開拓途上教会を、物心両面で支援し続けている大都市圏の教会もあります。しかし、教団全体として、キリストのみ体に所属しているもの、おなじ血によって生かされているものとしての、命の共有がないのです。いま私たちの教団に必要なのは、この、聖書的な教会観と、それに培われる本物の一体感です。

### Ⅲ．Ｃ．２　聖書的教会観に立った教団組織と運営

私たちの教団には２００を超える教会があります。そのうちの３分の１が経済的に豊かで、分け与える余裕のある教会です。3分の1が、やっと自立していける状態の教会です。そして残りの３分の１は、他の教会の支援がなければ存続できない状態にある教会です。実際には、この最後の３分の１のうちの多くは、さまざまな切り盛りをして、他からの支援を充分には受けずにやっています。その多くは、そこに遣わされた教職の、涙ぐましい努力によって可能となっています。それは、教団の中に聖書的な教会観がなく、教職の間に、本来あるべきほどのキリストの一致がないということであり、そのために、教団の中にも、キリストのみ体である教会として、機能すべきところが充分には機能していないのです。つまり、もっともっと強い一体感による愛の助け合い、協力、痛みの共有、喜びの共有がないのです。それらを発揮し強め発展させていくべき組織や機構が出来ていないのです。

大都市圏の大きな教会の牧師が、みな贅沢をしていると言おうとしているのではありません。一般社会の標準から言えば、贅沢な牧師など、多分、私たちの教団には一人もいないでしょう。しかしそれでもなお、大きな格差があるのです。そのために、痛んでいる伝道者がかなりの数にのぼり、成長できないでいる教会が幾つもあるのです。かつて、教団の経済がもう少し豊かだった頃、地方の開拓途上教会に対する教団の支援は、もう少ししっかりしていましたが、今は、非常に弱くなってしまいました。私たちの教団の、地方の開拓途上教会が生き残ることが出来るためには、絶対に、もっと強い支援、おなじキリストのみ体に連なるもの、おなじ聖霊の交わりのなかにあるものとしての、物心両面の支えが必要です。それが出来るように、また、そのような意識が深められ、強められていくような機構を作り上げなければなりません。

現在の、民主主義の理念に立った会衆形態、そこから必然的に生れてくる個教会主義を、改める必要が

あるでしょう。民主主義は聖書が教える政治形態でも、最善の政治形態でもないことを知らなければなりません。また、会衆主義が聖書的な教会政治形態でもないことを知り、連盟や同盟が聖書的教団のあり方なのではないとも、知らなければなりません。ましてや、いま私たちの教団のそこここで見られるようになってきた、親が牧師をしていた教会を、子が引き継ぐというような世襲制、個人商店そのものの教会のあり方は、許されるべきものではありません。もちろん、親が牧師をしていた教会を子が引き継ぐことの、すべてを悪と決め付けるのではありません。そこには、具体的にたくさんの利点があります。また必ずしも、親の牧師が子どもを甘やかせてそうなったのでもないと思います。他に方法がなかったのでしょう。信徒の多くがそのように願ったのでしょう。また、回りまわって数年後には子に巡ってくることまで、悪と決め付けているのでもありません、しかし、親の後をすぐさま子が引き継ぐのは、長い目で見るならば、けっして教団全体の益にはなりません。なぜならそれは、教会の私物化に繋がるからです。教会は、たとえひとりの伝道者が、誰の助けも協力もなしに開拓し、苦労に苦労を重ねて築き上げたとしても、その伝道者の所有ではないのです。教会の私物化は、キリストのみ体の病です。私物化の感覚を助長するようなことは避けなければなりません。私物化に見られるような個人主義が教団の中に強くなっては、今後、地方開拓教会の存続は、まず間違いなく不可能です。みんながそれぞれ勝手に好きなように伝道して、気が向いたならば協力もしよう、助けもしようというのでは、現代日本の地方伝道は消滅していきます。

聖書に提示された教会論に立ち、教団はキリストのみ体の具体的な現れであるということを、しっかりとわきまえた上で、教団の組織と構造を改革し、具体的政策を作りあげていくことが、緊急の課題です。直ちに手をつけ、推し進めていかなければなりません。与えられている期間は、わずか数年です。

### Ⅲ．Ｃ．３　地方の開拓教会を存続させるための具体適方策

では、地方開拓教会を存続させ、その活動を継続させるためには、どのような方策が可能か探ってみましょう。

①　経済格差の是正　　　　　地方の教会、特に開拓途上教会の困窮は、単に牧師の能力の低さによるのではなく、日本社会の構造的なものを、反映しているのだと認めなければなりません。教団は、そこに任命派遣した責任を果たすべきです。そのためには、まず、経済格差の是正を手がけなければなりません。東京都知事も、大坂府知事も、神奈川県知事も、故郷納税と言う案には反対しています。彼らの言うことにも一理以上の理があります。しかし、地方との格差の増大は、それらの理さえも「わがまま」にしてしまいます。日本の構造的欠陥を、私たちの教団は、さらに拡大した形で存続してきたのです。もちろん、何もしなかったのではなく、さまざまな支援対策をしてきたのですが、まだまだ不充分です。それは教会論の欠陥と教団の組織構造に問題があるのです。

要するに、大都市圏の強い教会は、自分たちの発展成長のかなりの部分は、地方の教会の犠牲の上に成り立っていることを認めて、感謝の気持ちを持って地方教会にお返しをすべきです。自分たちと何のかかわりもないと思っていた地方の教会が、実は、自分たちの成長の縁の下の力になっていたのです。もしも、たとえば、大都市圏の教会は、地方から出てきた信徒の十一献金を、出身教会に送り返すというしっかりとしたシステムを、教団レベルで進めたとしたらどうでしょう。地方の多くの開拓途上教会は、たちまち現在の倍以上の経済力をつけることになるのです。どうか誤解しないでください。私は十一献金を送り返すシステムを始めよと言っているのではありません。実際、いま私たちが直面している問題は、そのようなことで解決できるほど小さくないのです。でも、その精神を言っているのです。大都市圏の大教会が、地方の弱小開拓途上教会を支援するのではないのです。地方の弱小開拓途上教会こそ、大都市圏の多くの教会の支えになり続けてきたのだと言う、事実に向き合うべきだと言っているのです。

教団がキリストのみ体の具体的表現だとするならば、その中には、当然、愛の交わりが具体的に行われ

なければなりませんし、組織や構造もそれが闊達に行なわれるように作られていかなければなりません。

② 都市中心型の発想と活動計画の転換　教団の指導者、部の指導者の大部分は大都市圏の教会の教職です。その背景には利便性と言うこともあり、それが一概に悪とは言いきれません。しかし、その結果、発想自体が都市型になり、計画や実行も都市型になっています。「地方にも手弁当で出かけますよ」といわれても、都市型のプログラムと都市型の話を携えてきてくださったのでは、迷惑になるだけなのです。かといって、地方で開拓同然の教会を牧会している教職を招こうとしても、たいてい、経済的に困難なのです。教団指導者には、なんとしても、地方の文化や実情を理解する努力をしてもらわなければなりません。

③ 一教会一牧師の概念の転換　今後の過疎化、老齢化を考えると、一教会一牧師という形は不可能です。経済的に立ち行きません。牧師も不足します。少なくても、大部分の地方開拓教会ではそうなるのです。そこで考えられるのは、一人の牧師が、いくつかの地方教会を牧会することです。当然巡回牧師になります。単に、日曜日の説教だけではなく、週日も家庭訪問や聖書の勉強会に力を入れていくと良いでしょう。概念とシステムを変えるのです。幸い、今日の日本の交通はまだまだ便利です。また、信徒の家に泊まるのもさまざまな制約があるとはいえ、逆に、多くの利点も出てくるでしょう。ビジネスホテルも比較的安価です。大都市圏の牧師が引退して、年金をもらいながら、地方の複数の教会で巡回牧師として奉仕するのも、再献身のひとつとして大いに考えられます。いくつかの開拓教会の経済では不可能なことも、教団全体の取り組みとしてシステム化すれば可能なはずです

④ 信徒活動を活発化　当然、巡回牧師には欠点があります。とはいえ、足りない分を信徒の活動を活発にすることで、かなり補うことが出来、あるいは新しい可能性も開けてくることでしょう。今から、そのような方向に向けて、教団全体が動き、教職が自覚と理解をもって具体的方策をねり、信徒たちに自分の可能性に目覚めさせ、情熱を燃やさせるのです。ビジョンを与えて教育と訓練を進めていくのです。巡回牧師が来ることができない期間、自分たちで礼拝会を開き、いろいろな集会を保ち、交わりを継続し、信仰と生活の指導もできるようにしていくのです。説教も、司会も、その他すべての奉仕が信徒にも可能であることを示し、積極的にさせていくのです。もちろん、伝道も自分たちで可能であること、自分たちにこそ出来ることを自覚させるのです。

これは今までの信徒の立場とは随分異なるために、牧師たち以上に、信徒たちは驚き戸惑うに違いありません。また、教会のあり方として後退と受け取られることもあるでしょう。それでも、徹底した聖書的な教えに戻り、信徒の活動による教会の存在というあり方こそ、本来の教会のあり方であったことを信徒たちが理解しなければなりません。それを信徒たちが受け入れ、そこに使命感をもって、喜んで遂行していく気持ちを作り上げなければなりません。信徒たちに奉仕の喜びと感動を取り戻させ、その上に、巡回の牧師の支えがあるとするならば、そこにはかなりの可能性があります。

ここまで書き進めてきたとき、３０年近くも前にフィリピンで開拓した、田舎の教会に来ていた女性から手紙が来ました。ご主人の定年退職を機に、２人で小さな集落に開拓伝道を始めたとのことでした。私から信徒伝道者としての手ほどきを受け、ずっと教会で奉仕をしていたのですが、思い切って、開拓に出て７ヶ月、１９人の大人と１２人の二十歳前の若者が、洗礼を受けようとしていると、喜びをつづっていました。ごく普通の夫婦でしたが、長い間忠実な信徒として奉仕をしてきたのを基盤に、開拓牧師になろうと言うのです。私としては、自分が植えつけた伝道の精神が、今、このような形で現れてきたことを、とてもうれしく思います。ちなみに、フィリピンでは信徒が自分で伝道し、牧師になることはごく当然のことです。多くの牧師がそのようにして牧師になり、多くの教会がその

ようにして建てられています。

とはいえ、日本で信徒たちが牧師の働きをしていくためには、指導書やマニュアルも必要になるでしょう。実際の訓練も必要になるでしょう。しかし、絶対に不可能ではありません。今の日本で地方教会が生き残るためには、なんとしてもそれをしなければなりません。信徒たちに、信徒牧師の重要さを示し、使命感の中にも危機感を持たせ、主が来られるまで忠実に働く大切さを教えるのです。

巡回牧師は、たとえ自分が出席できる集会でも、徹底して補佐役、相談役、後押しの働きにまわり、出過ぎないことです。信徒の働きという、教会本来の形が、このようなところで取り戻されるのです。また、このような働きを励まし、奉仕者の中から将来伝道者になろうと志すものが起ることも想定し、今年から開始される通信制の神学校を積極的に生かしていくべきです。地方開拓教会の支援策の一環として、通信制学生への奨学金も、教団として考慮できるでしょう。また、巡回牧師の留守の間に「信徒牧師」の働きをする人たちのために、通信を利用しての聖書の学びの補佐や、説教の準備の指導も可能になるでしょう。たとえ数は少なくても、全時間を伝道牧会に用いる伝道者ではなくても、自分の職業を持ち、土地に根を下ろした「テント造り牧師」の存在も可能になります。かれらが、礼典や儀式においても、立派に牧師としての働きをすることが出来る、教団としての柔軟性、あるいは初代教会のような教会運営が必要です。

⑤ 緊急性　　　　　繰り返しますが、これは緊急の課題です。牧師の高齢化は間違いなく、確実に、ひたひたと押し寄せているのです。それを乗り越え、現在の地方の開拓途上教会を守り、存続させ、その使命を果たさせていくためには、一刻の猶予もなりません。教団の大都市圏にある教会が、これまでのように地方出身者を教会に迎え入れる機会を持ち続けるためにも、地方の開拓途上教会を存在させ続けなければなりません。教団全体が意識改革し、直ちに、方策を練り、実施していくことが求められています。

付録

## 地方伝道の困難さ

地方の伝道の困難さ、地方教会の成長の遅さについては、すでに多くの人々が語っています。地方伝道にたずさわっている者にとっては常識ですが、大都市圏の伝道しか経験したことのない方々には、あまり考えたこともない、なじみのない話かもしれません。あるいは、せいぜい、負け犬の遠吠え程度にしか思えない事柄かもしれません。それでもなお、地方伝道の困難さ、地方の教会が成長しない理由を挙げておかなければなりません。都市で育ち、都市の教会で救われ、都市の生活と都市の伝道しか知らない方にも、ぜひ、いくらかでも理解してもらいたいと願うからです。

### １．保守的閉鎖的文化

伝道の効果、あるいは教会の成長の多くは、その土地の文化に負います。私の個人的見解によりますと、祈りが伝道の成功の秘訣だとか、断食が成功をもたらしたなどという話は、そろそろ止めにして欲しいも

のです。祈りや断食を軽んじるのではありません。それらは大切です。祈りがあってこそ力強い伝道が可能です。断食は信頼と献身と決意の表現でしょう。ただし聖書は、伝道の成功や教会成長の秘訣として、祈りや断食を扱ってはいません。祈りがリバイバルをもたらしたというのも、間違っていないかも知れません。ところが、祈りがリバイバルをもたらさない場合もあります。祈りがダニエルをライオンの檻から救い出し、祈りがペテロを牢獄から助け出したのかも知れません。でも、祈りにもかかわらず、多くの神の人が殉教しました。すべては神のみ手の中にあり、私たちに求められているのは忠実さです。日本の宣教があまり効果を上げていないと判断されるならば、その通りです。しかしそれは、日本に来た宣教師たちの能力が劣っていたのでも、彼らに祈りと献身が足りなかったのでもありません。日本人伝道者の質が低く、霊性に問題があったからでもありません。文化が背景にあり、その背後に、神のご計画があるのです。

アガマ（アッセンブリーズ・オブ・ゴッドのアジア太平洋地域の宣教協力のための組織）やＪＥＡ関係の国際会議などで、さまざまな国の指導者たちとお話をしているうちに、しばしば、それぞれの牧会している教会のことに話がおよびました。それぞれの国の指導的な働きをしている人たちが、たくさん集まっていますので、「うちの教会は今７千人収容の会堂を建築中だ」とか、「うちの教会は、やっと２万人を突破したところだ」とか、「いいなー。うちは未だ千七百人だよ」とか。そして、「ブラザー・ササキ。お宅の教会はどうですか？」と来ます。そこで私は言います。「感謝なことに、今週の日曜礼拝会は、初めて１５人を突破しました。」

私の言葉を聞いて、ほとんどの人は言葉を失い、口を閉じてしまいます。私は慣れっこになっていますので、自信と誇りと、少しばかりの挑戦の気持ちで言います。「どうかお宅の国の優秀な伝道者を、宣教師として私の地域に送ってください。優秀ならば、多分３０人くらいの出席者は大丈夫ですよ。」じっさい、神学校で私と机を並べ、頭を悩ませていた兄弟たちが、いまや１万人、３万人の教会を牧会しているのです。伝道は単純なものではありません。さまざまな要因があり、成功失敗と、出席人数や献金額で簡単に評価できるものではありません。そのさまざまな要因の中で、文化が最も大きな要因のひとつなのです。

一般に、日本の文化は保守的だと言われ、閉鎖的だと言われます。ただし、日本人はこと技術だとか、産業だとか、芸術だとか、日常生活の事柄に関しては非常に刷新的であり、進歩的であり、改革的であり、開放的です。ところが、こと精神面になると、とてもとても閉鎖的です。日本人は世界で一番プラグマティックな国民、つまり実利主義的な国民性を持っているようです。何が具体的に、自分たちの利益になるかで、物事を判断するのです。それが、昔からよく言われる「和魂洋才」です。技術や学門、産業や芸術はどんどん取り入れますが、魂、精神はぜったいに譲らないのです。信仰はこの精神の奥深くにあるものなのです。

また、日本に持ち込まれたキリスト教は西洋の世界、その文化、生活と習慣に適応されたキリスト教であるために、日本の文化には、特に保守的で変化を嫌う地方の文化には馴染まないのです。そのような具体的例は枚挙に暇がありません。都会の日本人には、地方の田舎文化が理解できないかもしれません。特に地方では神道や仏教を中心とした習慣や行事が、今も社会や家庭の中でしっかりと根付き、息づいています。人々はその中で暮らしているのです。そこに、西洋的キリスト教が入ってくると、存在している地域社会の和が乱されてしまいます。それを人々はこの上なく嫌い、恐れます。日本人は、この「和」を最も大切にする国民なのです。和のためには正しいものも悪となり、悪いものも正義となるのです。キリスト教がどれほど正しく、すばらしいものであっても、存在している地域の和、家庭の和を乱し壊す限りは、絶対に悪であり、取り入れてはならないのです。

## ２．家族親族のしがらみ

地方の人々は、昔からの家族親族のしがらみの中で生きています。家族関係の濃さ、親族関係の強さは、都会で生まれ育った人には理解できません。都会で見る地方出身者の生活は、地方にいるときとはまったく異なっています。都会に出て行った地方の人々は地方で体験したようなしがらみを嫌い、隣近所との付き合いを避け、開放感を味わっているからです。そして一方では、自分自身のアイデンティティを持てなくなり、人ごみのなかで孤独に陥っています。それで、彼らは自分の土地に戻ると、かつてはあれほど嫌っていたしがらみを大切にするのです。

地方で暮らす人々の家族親族は、たいてい、檀家制度の残滓の中で生活しています。つまり、仏教的なつながりで関係を保ちながら、暮らしているのです。宗教信仰としての仏教はさほど強くはありません。しかし、親族関係の中での仏教的つながり、盆や仏壇を要にしたつながり、すなわち社会的要因としての仏教は、今も非常に強いのです。地方の人々は、これをとても大切にして生きています。普段は赤の他人のように暮らしている親族たち、あるいは自分たちが親戚関係にあるなどとは、露ほどにも知らずにいた人々が、仏教的な行事で集まって、改めて自分たちのつながりと絆を確認して喜び、安心するのです。日本人はそのようなことによって、和を作り上げ、保ち、自分のアイデンティティを確認するのです。地方に住む多くの人々は、このアイデンティティを失うと、風に弄ばれる根無し草のように感じて、まともに生きては行けなくなるほどなのです。

このような家族親族の中に、キリスト教信仰を持ち込むことは、普通の人にとっては、想像するだけで恐ろしいことです。仏壇を焼き捨てることを強要するのがキリスト教だと、あらぬ先入観を持たされた人は、キリスト教は家族や親族を崩壊させようとたくらむものだと、敵愾心を露にします（どれほど仏教を非難してもあまり問題にはなりませんが、仏壇を粗末にすることは大きな問題になります)。佐世保における私の伝道経験のなかでも、このようなことのために、信仰を捨てた人、あるいは、少なくても一時的に信仰を保留した人が、何人もいます。戸別訪問で知り合い、家庭聖書勉強会で救われた３０代半ばの主婦は、土地ではちょっとした会社の社長の奥さんでした。彼女が団地の一戸建ての住宅に住んでいたときには、信仰に対する態度は非常に積極的で、いつも私たちを喜んで迎えてくれました。ところが彼女たちの新居が、会社の創立者である夫の親の家がある、大きな敷地に建てられてからは、態度が一変したのです。私たちが訪れることを非常に恐れ、居留守を使うほどになってしまいました。家族関係の中で、自分ひとりだけクリスチャンになることが、どんなに大きな波紋を及ぼすか、彼女には良く理解できたのです。結局、彼女は信仰を捨てる決意をすることになりました。

もうひとりの４０代前半の主婦は、友人に連れられて私たちの集まりに出席し始め、個人的な聖書勉強会にも熱心に出るようになりました。数ヵ月後、クリスチャンになること決心し、信仰の告白をしました。ところが、その週のうちに彼女からの手紙が届きました。大きな会社の重役である、夫の親と同居して、毎日仏壇にお花と水とご飯を供えている自分が、クリスチャンになるということは、この家庭に、しいては親族一同の上に、どれほど大きな衝撃をもたらすかを考えると、クリスチャンを続けることは出来ない。自分の永遠の命のために、家族親族の和を犠牲には出来ないと、丁寧な文章で書かれていました。でも、自分は必ずクリスチャンとして生涯を終えますという結びの言葉が、唯一、私の慰めとなりました。

上記のふたつの例は、新米の牧師が家族親族仏壇などのことを知らずに、無茶な伝道をした結果ではありません。そのようなことを充分配慮し、納得がいくまで説明し、どのようにしたら良いかを丁寧に教えた上でのことです。一方、こんな話もあります。アメリカ兵と「出来ちゃって」(私の活動する佐世保市にはアメリカ海軍基地があります)、泣きながら教会に来だしたミーハーの女の子が、私に説得された相手のアメリカ兵とちゃんと結婚することになって、アメリカに渡っていきました。幸いなことに、彼の両親はしっかりしたクリスチャンだったということでした。アッセンブリー教会に行っていたと告げると、二人に思いっきりギューッと抱きしめられて、たくさんたくさんキスをされたそうです。数日後には、結婚式

とは別にお祝いのパーティーまで開かれて、涙が出るほど感激したということでした。ぐれて、家族や親族から見放されていた、すれっからしの女の子が、初めて自分という存在が受け入れられたと感じたらしいのです。「私はこれから良い子になります。いいえ、いい娘、いい母親になります」という手紙には、ちょっと泣かされました。

文化が効果的伝道の大きな要因となります。

### ３．爪弾きされた者の集まり

地方で伝道に応答する者、あるいは教会に来る者の多くは、良くて一匹狼の性格を持つ者、ふつうは、家族親族からも見放された者、社会から爪弾きされた者、鼻つまみ者が多くなります。しっかりとした家族の中、固い親族関係の中で確実に生活している者は、ちょっとやそっとでは福音に応答しません。教会にも来ません。それが自分たちの生活にどのような「悪影響」を与えるか、すぐに理解できるからです。また、良くも悪しくも、家族と親族の中で、自分のアイデンティティが保たれているからです。しかし、家族親族の爪弾き、地域社会の鼻つまみ者、あるいは無視されてどうでも良いと思われている者は、心配なく教会に来ることができるのです。少なからず表現にきついところがありますが、私の地方伝道の経験からは、そのように言って過言ではありません。

わたしの牧会する開拓教会の実情は、ふだん、継続して集会に出席しているのは３０名前後ですが、礼拝出席の平均はここ数年減少して、大人１５人前後というところです。この中で、普通の家族でごく当たり前の生活をしているのは、私の長男夫婦だけです。かなり重い精神的な異常や問題を抱えている者が、私の次男を含め、３名。そこまでは重くないけれど、仕事に就けないか、継続できないものが４名。軽度の自律神経失調あるいは統合失調、その他名前も分からないケースが８名。身体的障害のためにまったく仕事が出来ない者が２名。うち一人は筋ジストロで、右手がわずかに動くだけ。難病指定を受けた病気で、非常に困難な生活をしているものが１人。離婚再婚は現代では珍しくありませんが、私の長男家族以外は、みな離婚、再婚、再離婚。自己破産３人。生活保護が減って１人。年金生活者６人、中高生が４人と言ったところで、まともに安定した職を持っている者は、３人だけです。幾分、極端かもしれませんが、地方の現状を集約したような開拓教会です。

教会に来ているのがこのような種類の人たちであると、彼らの社会的つながりで人をキリストに導くことが、非常に困難になります。たとえ出来たとしても、つながりで教会に来る人は彼らと同様な人々となります。また、何かの拍子に一般の人が教会を訪れたとしても、このような人々を見ると再来することが少なくなります。イエス様が、収税人レビの家で食事をしたときの状況にそっくりです。この種の人々は教会成長の妨げとなります。だからと言って、教会から追い出そうとすると、この教会で奉仕をしてくださったＮ先生が、いみじくもおっしゃったように、イエス様も、「それでは、私も・・・」と、彼らと一緒に出て行ってしまわれます。

### ４．人口の流失

地方の教会の最も激しい痛みは、人口の流失です。日本全体、あるいは世界的傾向とも言える都市化に伴う地方人口の流失は、小さな市町村では過疎化となって現れています。私たちの例で見ると、私が赴任した当時、佐世保市は２５万人都市といわれていながら、実質は２３万人少々でした。経済不況のための人口流失はずっと続いています。長崎県全体の経済的衰退は著しく、昨年、東京などでは求人難と言われて有効求人倍率が５．５倍の頃、長崎県では０．５７倍でした。最低賃金は全国最低の秋田県よりも、１円高いだけであったと思います。私たちの教会でも、職を求め続けている人が数人いますが、もう、長い間見つからないで困っています。したがって、人々はどんどん大都市へと流れ出て行きます。５年後には消滅もしくはそれに近くなる集落が、県内に３０以上あると知事が語っています。長崎県そのものが、こ

のままでは、ほどなく夕張市のような状況に追い込まれるのではないかと、まことしやかに囁かれています（本当らしいです）。

私は、聖書学校を卒業してもうすぐ４２年になりますが、最初の２年間を東京で開拓をしたほか、フィリピンでの４年間の神学生時代を除いては、すべて地方での開拓伝道者として過ごしました。地方伝道が私の働きだと思っています。沖縄の山原（やんばる）と呼ばれる北部の過疎地帯では、毎年５人から１０人以上の高校卒業者を、京阪神地域に送り出しました。土地には仕事がないからです。現在の開拓教会には、それほど多くの高校生はいませんが、送り出していることに違いはありません。地方で救われる、あるいは教会に来る例外的な人々が高校生、中学生です。この子たちが少し教会に馴染み、救われ、奉仕も出来そうになる頃には、ほとんど、大都市に出て行ってしまいます。どれほど時間をかけ経費を費やして大切に育てても、彼らはめったに地方教会の力にはなれないのです。一旦土地を離れた若者の多くは帰ってきません。仕事がないからです。当然、他の土地から来る若者も、例外的です。佐世保ほどの規模を持つ都市でさえこうなのです。

出て行くのは彼らだけではありません。学校を卒業後、土地に残った若者たちの多くも、やがて就職難のために外に出て行かざるを得ません。それでも出て行けない若者の多くは、非常に劣悪な条件の下で働いています。いわゆるワーキング・プアで、真面目に働いていながら親の庇護がなければ生活できないのです。結婚も不可能です。そのために、私たちの教会を例にとると、ここ１５年の間に家族ごと引っ越していった信徒、夫と妻、あるいはいずれかが洗礼を受けていて、時には共に礼拝に出席していた者で、土地を離れていった者は、9組に及びます。全員が十一献金をしていた人たちです。米軍基地があるために、米兵と結婚してアメリカに渡った者が一番多く、５組に及びます。その他は京浜地区です。求道者として教会に出席して、奉仕もしていた家族持ちは４人います。彼らはみな通常の家族であり、収入があり、精神的にもひとりを除いては問題のない人々です。そのほか、独身で仕事を求めて土地を離れた信徒および求道者が、数えかたにもよりますが、５～９名います。一方、他の教会から流入してきた信徒は、一時的な「預かり信徒」が３人いただけです。そのうちの１人は、預かっている間、十一献金をしていました。

このような地方で救われる可能性が高いのは、公務員と呼ばれる人たちです。学校の先生や公官庁の職員の多くは、数年毎に転勤します。彼らはこの土地にやってきて、地元の人たちからは、無視されたりさげすまれたりしている者たちが来ていても、あまり気にせずに教会に来、福音を受け入れます。理解力も早く、生活が安定して給料もよく、教会の力になります。ところが、彼らがやっと一人前のクリスチャンらしくなったとき、転勤して行ってしまいます。私たちの教会では、そのような例が三つありました。

一方、この文章を書くきっかけとなった東京近郊の教会の状況は、まったく違いました。土曜日の朝と午後、それぞれ４０名前後の信徒たちが熱心に集会に出、奉仕をしておられる様子に感銘を受けたのですが、女性の牧師にお伺いすると、この教会は私たちの教会より一年後に開拓したということでした。私たちの教会に比べ、これほど素敵に成長しているのを見て、正直、この女性牧師の能力はどれほどなのかと驚く一方、その彼女がなぜ、私を招いてくださったのか、不思議にも思ったものです。ところが、この教会で救われ洗礼を受けた信徒で、転勤などの引越しで流失した信徒はまだ一人もいないと言うことを伺って、なるほどと納得したものです。救われた信徒は、信仰を失わない限り、すべてこの教会に出席し続け、奉仕をし、献金をしているそうです。東京の新興産業住宅地として、ここは人口の流入と発展が続いているのです。（転入してきた信徒の数は聞きそびれました）

教会の状況は、一般社会の姿と重なっています。地方交付税が話題になっていますが、私たちの自治体では、一人の子どもを幼稚園から育てて、高校を卒業させるまで、およそ千八百万円の公金を使うそうです。ところが卒業した者のほとんどは、土地に残りません。彼らが仕事をし、税金を納めるのは大都市な

のです。どれほど地方交付税をもらい、故郷納税で返してもらっても、追いつくものではありません。

### ５．潜在能力の低さ

地方に存在する私たちの教会は、潜在能力の低い教会です。集う人々の多くが、社会から見放されてしまったような人たちで、もともと潜在能力の低い人たちです。そのような人たちが、教会に休み場を得て集っているのです。そのために、どれほど聖書を教え訓練を施しても、なかなか理解も成長もしてくれません。スポーツジムのインストラクターは、将来の有名選手を育てる夢を描けます。そこまで行かなくても、秀でた者を育てる喜びがあります。しかし、心身障害者の施設で働く人々には、そのような夢を描くことは出来ません。せいぜい、少しでも普通の人に近づくように、精一杯の望みを持って、並大抵ではない努力を重ねます。そして、障害者が健常者と同じように、何かひとつでもすることができるようになった、ただのそれだけで大喜びをするのです。

障害者施設で働く人々の能力が低く、努力が足りないのではありません。スポーツジムで働く人たちの能力が高く、多くの努力を重ねているのでもありません。都会の教会で働く伝道者には、人よりも早く走り、高く跳べる人を育てるのと同じ喜びがあります。現在の地方の教会では、そのような喜びを持つ機会が少ないのです。明治、大正、昭和の前半とは違うのです。そういうわけで地方の教会では、司会や奏楽をする者がなかなか生れてきません。説教をすることが出来る信徒はごくわずかです。聖書を読んで、いくらかでも理解できる信徒も限られています。それを上手に説明し、実生活に適応して話すことが出来る者など、滅多にいません。教えても教えても、出来ません。励ましても励ましても、積極的にはなれません。これはと思う青少年は、やがて遠くに出て行きます。おやっと思う公務員は数年で転勤になります。

東京近郊にある人口流入地域の、若い教会の話を聞く機会がありました。幸いにも、その教会には音大を出た信徒が何人もいるそうです。ピアノ科も声楽科もいるそうです。外大を出た人もいるそうです。コンピュータのプログラムを作っている人がもっとも活発な信徒で、教会のホームページの責任をもっているそうです。文章を書いて生計を立てている信徒もいるそうです。一級建築士もいれば歯医者もいるそうです。きちっとした仕事をしている人が、大部分だそうです。カルチャー・スクールのようなことをして、伝道をするご婦人方もいるそうです。幼児教育の専門家がいて、近所の証になっているそうです。これは、私が責任を持っている、地方の開拓途上教会の正反対の教会です。

地方教会には、多くの場合、経済的な潜在能力もありません。集う者の多くが能力をもたない人々であり、仕事のない人であり、生徒たちだからです。ですから伝道者は、最低レベルの生活に耐えなければなりません。何を行なうのにも、経済的な裏付けが必要です。それだけに、やっと存在し続けるのが精一杯のありさまです。ですからまた、優秀な若手の牧師が、このような状態の教会に喜んで赴任してくることもまれです。いきおい、若い伝道者は、伝道しやすい都会の選ぶことになります。

私たちの教団は、牧師の任命制を採ってきました。しかしここしばらくは、本人の希望を大きく取り入れた任命制となっています。現在地方で働いている牧師の多くは、まだ任命制が厳しかった頃、自分の望みや願いとは関係なく、教団によって任命され派遣された者です。彼らが今いる土地で働いているのは、彼らの選択ではないのです。（私の場合は、本人の納得と同意の上、むしろ、望んでのことですが・・・）そして、もう長い間そこに働き続け、年齢も重ね、そこから動くことが困難になっています。そして、小さな開拓同然の教会を守りながら、華々しい都会の教会の話を聞き、自分の無能力さに敗北感すら抱いています。私も個人的に言われたものです。「結局、能力のある者は都会に出て働くものだよ」。でも、私の神学校時代の同級生たちが、それぞれの国で、数千人、数万人の教会を牧会しているのを見聞きすると、教会の大小は必ずしも牧師の能力や勤勉さに繋がるものではないことがわかります。むしろ文化的な要因が大きく、その土地に住んでいる人々の状態によるのです。

## ５．教団の地方伝道の取り扱い

私たちの教団は、全国都道府県に少なくても一つの教会を目指して、県庁所在地だけではなく、周辺の小都市にも積極的に開拓伝道を進めてきました。少なくても、ふた昔ほど前まではそうだったように思います。しかし、これといった地方伝道の方策を探ったり、地方伝道のために特別な教育や訓練を施したり、特別な企画や支援を行ってきたということはありません。大都市圏で働こうとする者も、地方の開拓に出る者も、同じ教えを受け、同じ訓練を与えられ、同じような責任を負わされ、つまり、早く自給教会を建てるように求められて、派遣されただけです。自給教会は、いわゆる「インディジネス教会の三つのセルフ」のひとつですが、自立は西洋型のものの考え方であって、聖書の教えではありません。それがあたかも正しいことでもあるかのように、異なった文化の中で強要されてきたところにも、日本の地方開拓の問題があります。

神学校で教えてくださった教師の多くは、神学校の近くの牧師、すなわち大都市の牧師たちです。地方伝道の経験を持つ牧師はわずかでした。教えに来るにも遠く時間がかかり、金もかかる上に、あまりうだつの上がらない伝道、つまり、模範にならないと思われた伝道をしていたからです。本当は、地方の伝道者として、非常にすばらしい伝道をしていたのかもしれません。でも、教会は小さく、経済も弱かったのです。そういうわけで、私たちは地方の伝道の方策を教わることもなく、地方伝道の問題点や可能性を探る学びもしなかったのです。夏季や冬季の実習に行って、うわべを少し見たにすぎません。昔の神学生ならば、地方で苦労している先輩を見て、情熱を燃やすことが出来たかもしれませんが、現代の神学生は、多分、こんな田舎で伝道しては、先がないと判断する方が多いことでしょう。

教団はまた、経済的にも地方に対する特別な配慮を欠いています。先に触れたように、まったく異なった経済事情の中で働かせられながら、自給教会になることだけは同様に最優先課題に据えられ、プレッシャーをかけられます。私は、沖縄の北部「やんばる」へ、開拓伝道に遣わされているときに、正教師試験を受けましたが、２回失敗しました。失敗の理由のひとつは、「伝道はしているが牧会が出来ていない」と判断されたことです。判断の基準は、献金額が少ないと言うことです。当時、私は５つの集落で集会を行い、５０人ほどの出席者を得ていましたが、献金はまさに雀の涙ほどでした。とにかく、貧しかったのです。当時の沖縄の人々の平均収入は、本土の人々の６０パーセント。「やんばる」の人たちの平均収入は、沖縄全体の６０パーセントでした。本土の人の３分の１程度の収入です。正教師検定委員の方々が牧会していた教会が存在する、大都市圏の平均収入に比べるとさらに少なかったのです。でもそのようなことは、私の正教師検定には考慮されませんでした。現金の代わりに、苦菜（にがな）や苦瓜、サツマイモやパパイヤが、私たちの得ていた献げ物だったのです。正教師検定委員の方々に、いまさらうらみつらみを言おうとしているのではありません。教団がそういう環境にあったということを言おうとしているのです。

それにもかかわらず、教団への負担金は教会経済の十分の一です。大教会にとっての十分の一と、経済困窮地域での開拓教会の十分の一では、負担の重みがまったく異なります。これには十一献金と言う聖書の教えが背景としてあるのだと思いますが、正しい理解と正しい適用だとは考えられません。地方の開拓から十一を取ってはならないというのではなく、そうするのであるならば、大都市圏の強い教会からは、十分の二、十分の三を取ってもおかしくないということです。イスラエルの十分の一の捧げものにしても、基本的には、耕す土地がかなり公平に分配されたという前提を背景に、定められたものです。社会構造が単純で同一に近い生活をしている上に、収入の手段となる土地が公平に分配された人々に定められた決まりが、現代のように自由な資本主義経済で格差が広がった人々に、そのまま適応されるのは正しくはありません。ましてや、格差の典型である地方の開拓に任命された教職の牧会する教会に、一律に十一を求めるのは正しくないことです。十一という文字ではなく、十一の精神を生かすのが私たちのやり方のはずです。

それでも一律に十一をと言うならば、経済的に豊かな教会は、地方で困窮している教会を、あるいは信徒や牧師を、積極的に支援する方策を練らなければなりません。それも聖書の教えのはずです。そして、旧約の文字の律法よりも重みのある、愛と憐れみの教えであるはずです。教団は任命派遣をしたのですから、しかもしばらく前までは本人の意思とは関わりなく、教団の権威によってそれをしたのですから、教団の組織を整え、派遣した教職と教会の責任を取るのが「教団としての本筋」です。ただし、ひとりひとりの教職が、献身者としての信仰と態度を貫くことは、ひとりひとりの正しい生き方であって、ないがしろにされるべきではありません。「教団の責任」と言う言葉を金科玉条に掲げ、自分の献身態度を棚に上げるようなことがあってはならないのです。個人主義になると、権利の主張ばかりが突出してしまいます。

私たちの教団では、派遣された教職の多くが、たとえ心の中に不平があってもそれを口に出さず、不公平だと感じていても泣き言を言わず、献身してきたのです。人間の世界に完全な公平はないと知っているからです。しかし教団は、出来るだけそれに報いるべきです。私は宣教師時代、現地の協力者に厳しい献身を求めてやってきました。それで、日本に帰ってきたときも、苦しい働きになることは充分に理解していましたが、地方都市の開拓を引き受け、協力伝道者に求めた献身を自分でも実践しようとしたのです。ですから、いわば自業自得。不平も不満もありません。しかし、現状の中で考えたのは、このような場に生き、このような中で働くことになったのには、何か理由があるのではないかということでした。

そういうわけで、地方の開拓途上教会のために声を上げるのも、私の役割だと思うようになったのです。地方で働いている教職者の多くは、謙虚で謙遜な方たちです。固い献身態度を持っておられます。少し古い年代だと、「武士は喰わねど高楊枝」に信仰を加えて生きてきたのです。泣き言を並べたり、不平をぶつけたりはしないでしょう。そこで、私が声を上げようとしたのです。日本での伝道は困難です。そのなかでも、現代の地方伝道は非常に困難です。いま教団は、地方の伝道について真剣に考え、真剣に方策を立て、真剣に対策を練って、速やかに実行に移していかなければならないのです。

**（さて、今は2025年の初夏。上の文章を書いてから15年以上も経っています。その間に、世界は随分変わりました。私が書いた教団の教会についての予想は、大まかには当たっていますが、教団はそれなりに対策を考え、実行して来たものと思います。ですから、田舎の教会の大変な状態はまだ継続してはいますが、閉鎖されるまでには至っていません。大変な努力があってのことだと思います。そしてこの間、世界は大きく変化をとげてきました。とくに、コンピュータ関係の発展が著しく、教会の運営もコンピュータなしには考えられなくなってきまし。特に、田舎の教会の諸問題は、ユーチューブやズームを使用することによって、随分、様変わりしてきました。これからもこのような通信機器の使用により、伝道、教会活動に、大きな変化が起こり、教会観さえ変わる様相を見せています。また、ここ数年の AI の発展もすさまじく、教会にも、かなりの影響をあたえることでしょう。教会が自分たちの使命達成のために、これらの機器を積極的にまた効果的に用いて、主から与えられた使命を果たして行けるようにと、願ってやみません。）**